

11) 甲状腺分化癌に対する補助療法としての ^{131}I 療法の有用性

筒井 一哉・佐藤 幸示 (県立がんセンター
新潟病院内科)
佐野 宗明 (同 外科)
長谷川 聡 (同 耳鼻科)

1975～1992年まで、当院で甲状腺 ^{131}I 療法を行った症例は152例である。投与理由は遠隔転移61例(40.1%)、頸部腫瘍残存16例(10.5%)、補助療法75例(49.3%)である。今回、この補助療法の有用性を検討した。

補助療法の対象は、1) 分化癌が甲状腺被膜外に発育しているもの、2) 再発症例、3) 全摘後も血中 Tg 高値例、とした。これらの症例に、 ^{131}I 3.7GBq (100 mCi) を投与した。

結果、1) 補助療法を施行した75例中10例(13.3%)に遠隔転移がみられ、うち、5例は occult metastasis であった。2) 遠隔転移していた10例は全例生存中であり、現在、担癌状態のものは3例にすぎなかった。3) 甲状腺分化癌のいわゆる high risk group の補助療法施行例の5年生存率は87.3%、10年生存率は80.6%とよく、非投与群に比し、有意に延命した。

結論、甲状腺分化癌の extrathyroidal extension のみられる high risk group には、術後、 ^{131}I による補助療法を行うべきである。

12) 術前甲状腺癌との鑑別が困難であった異所性胸腺腫の1例

伊賀 芳朗・宮下 薫 (燕労災病院外科)
茅嶋康太郎 (新潟大学第一病理)
本山 梯一 (新潟大学第一病理)

症例は62才女性、49才時、異所性胸腺腫にて摘出術を受けたが、今回同部に再び腫瘍を認め当科を受診した。左前頸部には手術痕跡があり、その直上に母指頭大、弾性硬の表面平滑な腫瘍を触知した。CT および US で甲状腺左葉の中部から下極に内部やや不均一で石灰化を伴う腫瘍を認め、正常甲状腺との境界が不明瞭であった。 ^{201}Tl で腫瘍に一致した集積を認め、穿刺生検にてリンパ球とわずかな上皮細胞を認めた。手術所見では腫瘍は甲状腺、周囲組織と疎に癒着しているが容易に剝離され摘出した。甲状腺には腫瘍を触知せず、転移を疑わせるリンパ節を認めなかった。標本は大きさ 4.0×2.5×2.0 cm で被膜を有し、淡黄色の比較的均一な剖面であった。術中迅速標本でリンパ球様細胞の増殖を認め、永久標本

により浸潤性胸腺腫と診断された。術後経過は順調で、現在 CT, MRI 等にて経過観察中である。頸部悪性腫瘍の鑑別疾患として、まれではあるが重要と考え報告した。

13) 肺癌手術症例における病名告知

小池 輝明・寺島 雅範 (県立がんセンター)
滝沢 恒世・赤松 秀樹 (新潟病院胸部外科)

がん患者に対する病名告知には種々の問題が含まれている。

当科では入院時に患者本人ならびに家族を対象とした病名告知に関するアンケート調査を行い、その結果をもとに病名を告知している。

昨年3月より開始し約120名の肺癌手術症例を対象としたアンケートによると、患者本人が病名の告知を希望しているのは82%、家族が本人への告知を希望しているのは60%であった。

当科では原則として患者本人ならびに家族も告知を希望している場合に病名を告知している。

昨年末での告知率は33%であったが、今後は更に上昇すると考えられる。

14) 顎・口腔領域における重複癌症例の臨床的検討

—治療後の経過観察への提言—

田中 彰・土川 幸三 (日本歯科大学新潟
加藤 讓治 (歯学部第二口腔
外科)

近年、臨床上の問題点の1つに、口腔癌治療後、良好な制御状態でありながら、他領域に発生した後発癌の発見が遅れ腫瘍死の転帰をたどる症例の増加がある。治療後の経過観察において、いかに後発癌の早期発見を行うかが、予後を左右する因子の1つとして重要と考えられるようになった。そこで今回顎・口腔領域における重複癌患者47名に対し、Retrospective な検討を行い口腔癌治療後の経過観察の在り方を検討した。顎・口腔領域を先発癌とする25例に対し検討を加えたところ、経過観察中に自覚症状の発現を契機として後発他領域癌の発見がなされていたものが18例(72.0%)で、Stage III, IV が66.7%と進行癌である傾向が同われ、上部消化管と Multicentric zone 内での発生が64.0%を占めた。顎・口腔領域癌治療後の経過観察において長期にわたる高頻度発生領域の定期的精査の必要性を再認識させられた。